

## 六代

元暦二年の春の暮れ、長門国壇ノ浦にて平家つひにはろびにけり。

同十一月七日、鎌倉の源二位頼朝卿の代官として、北条四郎時政、六万余騎を相具して都へ入る。

北条四郎策に、「平家の子孫といはん人、尋ね出したらお輩においては、所望こふによるべし」と披露せらる。京中の者ども、案内は知ったり、勸賞蒙らんとて、尋ねもとむるぞうたてき。かかりければ、いくらも尋ね出したりけり。下臈の子なれども、色白う見めよきをば召し出だいて、「是はなんの中将殿の若君」、「彼少将殿の君達」と申せば、父母泣きかなしめども、「あれは介錯が申し候」、「あれはめのが申す」などいふ間、無下にをさなきをば水に入れ、土にうづみ、少しおとなしきをばおしころし、さしころす。母がかなしみ、めのが歎き、たとへんかたぞなかりける。北条も子孫さすが多ければ、是をいみじとは思はねど、世にしたがふならひなれば、力およばず。

中にも小松三位中将維盛卿の若君、六代御前とておはすなり。平家の嫡々なるうへ、年もおとなしうましますなり。北条四郎、いかにもしてとり奉らんとて、手を分けて求められけれども、尋ねかねて、既に鎌倉に下らんとせられける処に、ある女房の六波羅に出でて申しけるは、「大覚寺と申す山寺の北のかた、菖蒲谷と申す所にこそ、小松三位中将殿の北の方、若君、姫君おはしませ」と申せば、時政やがて人をつけて、其あたりをうかがはせける程に、ある坊に女房達、をさなき人、あまたゆゆしく忍びたるていにてすまひけり。是ぞ一定そにておはしますらんと思ひ、いそぎ走り帰ってかくと申せば、次の日かしくにうちむかひ、四方を打ちかこみ、「平家小松三位中将殿の若君、六代御前、是におはしますと承って、鎌倉殿の御代官に北条四郎時政と申す者が、御むかへに参って候ふ。はやはや出だし参らせ給へ」と申されければ、母うへ是を聞き給ふに、つやつや物もおよばえ給はず。

元暦二年の春の暮れ、長門国壇ノ浦で平家がついに滅んでしまった。

同年11月7日、鎌倉の源二位頼朝卿の代官として、北条四郎時政が六万余騎を率いて都に入る。

北条四郎は計略をめぐらし、「平家の子孫という人を、探し出した人には、褒美は望みのまま」と広く知らせた。京中の者たちが、土地の様子は分かっている、褒美をいただこうとおもって、探し歩くのは嘆かわしい。そんなわけで、いくらでも探し出したのだ。身分は低いけれど、色が白く見た目がよい子を連れてきて、「これはだれその中将殿の若君」、「あの少将殿の子」というので、父母は泣き悲しむけれど、「あれは後見人が言っております」、「あれは乳母が言う」など言うので、とても幼い子は水に落とし、土に埋め、少年長の子はおさえつけて殺し、刺し殺す。母の悲しみ、乳母の嘆きは、たとえようがない。北条も子孫がやはり多いので、これでよいとは思わないけれど、上の命令には従うものなので、どうにもできない。

中でも小松三位中将維盛卿の若君で、六代御前という人がいると聞く。平家の嫡流であるうえ、一人前の年ごろである。北条四郎は、なんとかして捕らえたいと思って、手分けして探したが、見つけ出すことができず、もう鎌倉に下ろうとしていたところに、ある女房が六波羅に出頭して言うには、「大覚寺という山寺の北の、菖蒲谷という所に、小松三位中将殿の北の方、若君、姫君がいらっしゃいます」と言うので、時政はすぐにそのあたりを探らせたところ、ある僧坊に女房たちや幼い子がおおぜいいて、ひどく人目を避けるように暮らしていた。これはきっとそうだろうと思い、急いで戻って報告すると、次の日そこに行って、四方を囲み、「平家小松三位中将殿の若君、六代御前がここにいらっしゃるとうかがって、鎌倉殿の代官の北条四郎時政と申す者が、お迎えに参りました。はやくお出してください。」と言ったので、母上はこれを聞いて動転してしまった。

齋藤五、齋藤六はしりまはって見けれども、武士ども四方をうちかこみ、いつかたより出だし奉るべしとおぼえず。めのとの女房も御まへに倒れふし、声も惜しまずをめきさけぶ。北条も是を聞いて、よに心苦しげに思ひ、涙のごひ、つくづくとぞ待たれける。ややあつてかさねて申されけるは、「世もいまだしづまり候はねば、しどけなき事もぞ候ふとて、御むかへに参つて候ふ。別の御事は候ふまじ。はやはや出だし参らさせ給へ」と申されければ、六代御前、「つひにのがるまじう候へ」とて、御輿に乗り給ふ。今年はわづかに十二にこそなり給へども、よのつねの十四五よりはおとなしく、みめかたち優におはしければ、敵によわげを見えじと、おさふる袖のひまよりも、余りて涙ぞこぼれける。武士ども前後左右に打ちかこんで出でにけり。齋藤五、齋藤六御輿の左右について大覚寺より六波羅まで、かちはだしにてぞ走りける。

母うへ、天にあふぎ地に伏して、もだえこがれ給ひけり。「此日比平家の子どもとりあつめて、おしころし、さしころし、さまざまにすときゆれば、我子はいかにしてかうしなはんずらん。此三年が間、夜昼肝心を消しつつ、思ひまうける事なれども、さすが昨日今日とは思ひよらず。終にとられぬることのかなしさよ。唯今もやうしなひつらん」と、かきくどき泣くより外の事ぞなき。

さる程に夜も明けぬ。齋藤六、大覚寺へ帰り参りたり。母うへ「さていかにやいかに」と問ひ給へば、「只今までは別の御事も候はず。御文の候」とて、取り出して奉る。あけてご覧ずれば、「いかに御心苦しう思し召され候らむ。只今までは別の事も候はず。いつしか誰々も御恋しうこそ候へ」と、よにおとなしやかに書き給へり。母うへ是を見給ひて、とかうの事も宣はず。ふみをふところに引き入れて、うつぶしにぞなれける。誠に心のうちさこそはおはしけめと、おしはかられて哀れなり。かくて遥かに時刻おしうつりければ、母うへ泣く泣く御返事書いてたうでんげり。齋藤六暇申してまかり出づ。

齋藤五、齋藤六は走り回って見ると、武士たちが四方を囲み、どこからもお逃がしすることはできないように思える。乳母の女房も御前に突っ伏して、声を限りに泣き叫ぶ。北条もこれを聞いて、とても心苦しいと思い、涙をぬぐい、じつと待っていた。しばらくして重ねて言うには、「世もまだ鎮まっていますので行き届かないことがあってはいけないと思ひまして、お迎えにまいったのです。ただそれだけのことです。早く早くお出してください」と言ったので、六代御前は「もう逃げられないようです」と言って、御輿に乗った。今年はずか 12 歳になられたが、普通の 14、5 歳よりもしっかりしていて、見目かたちも品があるので、敵に弱みをみせまいと、押さえた袖のすき間から、涙がこぼれおちた。武士たちが前後左右にかこんで出発した。齋藤五、齋藤六は御輿の左右について大覚寺から六波羅まで、履き物をはかずはだしで走った。

母上は、天をあおぎ地に伏して、身もだえて嘆いた。「このごろは平家の子どもたちを集めて、おさえつけて殺し、刺し殺し、いろいろやっていると噂されているので、我が子はどのようにして殺されるのだろう。この 3 年間、夜も昼もいつも胸騒ぎがおさえられず、とうに覚悟していたことだけれど、それでも昨日今日とは思わなかった。とうとう奪われてしまうことの悲しさよ。今この時にも殺されているのだろうか」と、嘆きの言葉をくりかえし、泣くことしかできない。

そうこうするうちに夜が明けた。齋藤六が大覚寺へ帰ってきた。母上が「それで、どうなったの」と尋ねると、「今はまだ無事です。お手紙があります」といって取り出してさしあげる。ひらいてご覧になると、「どんなにか胸を痛めていらっやることでしょう。今はまだ無事です。早くもみなさんのことが恋しいです」と、じつにしっかりしたようすで書いていた。母上はこれを見て、何もおっしゃらない。手紙を懐に入れて、泣き伏した。ほんとうにご心中はいかばかりかと、想像されてつらい。こうするうちにずいぶん時間がたったので、母上は泣く泣くお返事を書いて渡した。齋藤六は別れのあいさつをして立ち去った。

めのと女の房、せめても心のあられずさに、はしり出でて、いづくをさすともなく、その<sup>へん</sup>辺を足にまかせて泣きありくほどに、ある人の申しけるは、「このおくに<sup>たかお</sup>高雄といふ山寺あり。その<sup>ひじり</sup>聖文覚房と申す人こそ、鎌倉殿にゆゆしき大事の人に思はれ参らせておはしますが、上臈<sup>じょうろう</sup>の御子<sup>おん</sup>を御弟子<sup>おん</sup>にせんとして、ほしがらるなれ」と申しければ、うれしき事を聞きぬと思ひて、母うへにかくとも申さず、ただ一人<sup>いちにん</sup>高雄に尋ね入り、聖におかひ奉って、「今年十二にならせ給ひつる若君を、昨日武士にとられてさぶらふ。御命<sup>おん</sup>こひうけ参らせ給ひて、御弟子<sup>おん</sup>にせさせ給ひなんや」とて、聖の前に倒れふし、声も惜しまず泣きさけぶ。まことに、せんかたなげにぞ見えたりける。聖むざんにおぼえければ、事の子細を問ひ給ふ。「さて武士をば誰<sup>たれ</sup>といひつる。「北条とこそ申しさぶらひつれ。「いでいでさらば行きむかひて尋ねむ」とて、つき出でぬ。

<sup>ひじり</sup>聖六波羅にゆきむかって、事の子細を問ひ給ふ。北条申されけるは、「鎌倉殿の仰せに、『平家の子孫、京中におほくしのんでありと聞く。中にも小松三位中将<sup>こまつのみんみのちゆうじょう</sup>の子息、平家の嫡々なるうへ、年もおとなしかなり。いかにも尋ねい出して失ふべし」と、仰せを蒙って候ひしが、此若公は在所<sup>この</sup>を知り奉らで、尋ねかねて既におなう<sup>まか</sup>罷り下らむとし候ひつるが、思はざる外<sup>おとどひ</sup>、一昨日聞き出だして、昨日むかへ奉って候へども、なのめならずうつくしうおはする間、あまりにいとほしくて、いまだともかうもし奉らで、おき参らせて候」と申せば、聖、「いでさらば見奉らん」とて、若君のおはしける所へ参って見参らせ給へば、二重織物の直垂に、黒木の数珠手にぬき入れておはします。髪のかかり、すがた、事がら、誠にあてにうつくしく、この世の人とも見え給はず。こよひうちとけて寝給はぬとおぼしくて、すこしおもやせ給へるにつけて、いとど心苦しうらくぞおぼえける。聖を御覧じて、何とかおぼしけん、涙ぐみ給へば、聖も是を見奉って、すぞろに墨染の袖をぞしぼりける。たとひすゑの世にいかなるあ<sup>かたき</sup>敵になるとも、いかがは是を失ひ奉るべきと、かなしうおぼえければ、北条に宣ひけるは、「この若君を見奉るに、先世<sup>ぜんぜ</sup>の事にや候らん、あまりにいとほしう思ひ奉り候ふ。二十日が命をのべてたべ。

乳母の女房は、心が乱れどうにもたまらなくなって、走り出て、行くあてもなく、そのあたりを足まかせに泣きながら歩き回っているうち、ある人が、「この奥に高雄といふ山寺がある。その寺にいる聖の文覚房という人は、鎌倉殿からこの上なく大事な恩人だと思われていますが、高貴な人の子どもを弟子にしたいと、思っておられるそうです」と言ったので、うれしいことを聞いたとあって、母上<sup>いちはん</sup>に言わないまま、たった一人で高雄を尋ね、文覚にむかって、「今年12歳になる若君を、昨日武士に奪われました。命を助けるようお願い出て、御房のお弟子にしてくださいませんか」と言って、文覚の前に突つ伏し、大声で泣き叫ぶ。ほんとうにほかにどうすることもできないように見えた。文覚は残酷な話だと思ったので、詳しく尋ねた。「それで武士は誰と言ったのか」「北条と言いました」「よしよし、では出向いて話をしてみようか」と言って、出かけた。

文覚は六波羅に行つて、事の子細を尋ねた。北条が言うには、「鎌倉殿から『平家の子孫が京の中に多く隠れていると聞く。中でも維盛卿の子息は、平家の嫡流であるうへ、一人前の年ごろだそうだ。なんとかして探し出し殺せ』とのご命令を受けましたが、この若君の在所が分からず、探し出せなくて、もう鎌倉にむなく帰ろうとしていましたが、思いがけず、一昨日情報を得て、昨日お迎えにいきましたが、格別にかわいらしいので、あまりに気の毒で、まだどうもせずに、そのままおいています」と言うので、文覚は「では、お目にかかろう」と言って、若君がいらっしゃる所へ言つて見ると、二重織物の直垂を着て、黒木の数珠を手にかけていらっしゃる。髪のかかりぐあい、容姿、人品、ほんとうに気高くてかわいらしく、この世の人とも思えない。夜はあまり寝られなかったと思われ、すこし顔がやつれて見えるのも、ますます心が痛み力になりたいと思った。文覚を見て、どう思ったのだろうか、涙ぐんだので、文覚も若君を見て、ひたすら墨染の袖にこぼれ落ちる涙をしぼった。たとえ後でどのような仇敵になつたとしても、どうして命を奪うことができようかと、悲しく思ったので、北条に、「この若君を拝見すると、前世からの縁でしょうか、あまりに気の毒に思います。20日間処刑を延ばしてください。

鎌倉殿へ参って申しあづかり候はむ。聖、鎌倉殿を世にあらせ奉らんとて、わが身も流人でありながら、院宣うかがうて奉らんとて、京へ上るに、案内も知らぬ富士川の尻に、夜わたりかかって、既におしながされんとしたりし事、高師の山にてひっぱぎにあひ、手をすって命ばかりいき、福原の籠の御所へ参り、院宣申しだいて奉りしときの約束には、『いかなる大事をも申せ。聖が申さん事をば、頼朝が一期の間はかなへん』とこそ宣ひしか。鎌倉殿、よも忘れ給はじ」とて、その暁立ちにけり。

かくて明し暮し給ふほどに、二十日の過ぐるは夢なれや。聖はいまだ見えざりけり。北条も、「文覚房の約束の日数も過ぎぬ。さのみ在京して年を暮すべきにもあらず。今は下らむ」とて、同じき十二月十六日、北条四郎、若公具し奉って、既に都を立ちにけり。六代御前はさしもはなれがたくおぼしける母うへ、めのとの女房にもわかれば、住みなれし都をも雲井のよそにかへりみて、今日をかぎりの東路におもむかれけん心のうち、おしはかられて哀れなり。駒をはやむる武士あれば、我頸うたんずるかど肝を消し、物いひかはす人あれば、既に今やと心をつくす。四の宮河原と思へども、関山をもうちこえて、大津の浦になりにけり。栗津の原かとうかがへども、今日もはや暮れにけり。国々宿々打過ぎ打過ぎ行く程に、駿河国にもつき給ひぬ。若公の露の御命、今日をかぎりどぞきこえける。

千本の松原に武士どもみなおりみて、御輿かきすゑさせ、敷皮しいて若公すゑ奉る。北条四郎、若公の御まへちかう参って申されけるは、「是まで具し参らせ候ひつるは、別の事候はず。もしみちにて聖にもや行きあひ候ふと、待ちすぐし参らせ候ひつるなり。御心ざしの程は見え参らせ候ひぬ。足柄山の東までお連れ申しては、鎌倉殿の御心中も知りがたう候へば、近江国にてうしなひ参らせて候ふよし、披露仕り候ふべし。鎌倉殿に誰申し候ふとも、よも叶ひ候はじ」と、泣く泣く申しければ、若公ともかうもその返事をばし給はず。

鎌倉殿のもとに行つて、わたしに身柄をあずけるよう交渉できます。私は、鎌倉殿を世に出そうと思って、自分自身も流人でありながら、院宣をいただこうと、京に上る時に、地理もわからない富士川の河口を夜に渡りかかって、あやうく押し流されそうになったこと、高師の山で盗賊にあい、手をすり合わせて頼んで命だけは助けてもらい、福原の籠の御所に参上して、院宣をいただいてきた時に約束して、『どんなことでも申せ。聖が申すことは、この頼朝が生きている間は叶えよう』とおっしゃった。鎌倉殿は、まさか忘れてはおられるまい」と言つて、夜明けごろに出立した。

一日一日が過ぎていって、20日間が過ぎるのは夢のようだ。文覚はまだ帰つてこない。北条も、「文覚房が約束した日数も過ぎた。このまま京にいて年を越すこともできない。もう下ろう」と言つて、同年12月16日に、北条四郎は若君を連れて、もはや都を出立した。六代御前はあれほど離れがたく思っていた母上や乳母の女房とも別れて、住みなれた都から遠く離れてふりかえり、二度ともどることのない東路を進んでいく心の中は、想像するとあわれである。駒を急がせる武士がいれば、私の頸を打とうとするのかと肝をつぶし、言葉を交わす人たちがいれば、もはやこれまでかと神経をすり減らす。四の宮河原で処刑かと思えば、関山を越えて、大津の浦に着いてしまった。栗津の原かと様子をうかがうが、今日もはやも暮れてしまった。国々宿場々々を通過していくうちに、駿河国に着いた。若君のはかない命は、今日が最期と聞こえてきた。

千本の松原に武士たちは全員座つて、輿を地面に置き、敷皮をしいて若君を座らせる。北条四郎が、若君の前に近寄つて言うには、「ここまでお連れしたのは、他でもありません。もし途中で文覚房に行き会つたのではないかと、時間を稼いでいたのです。あなたへの厚意はお示しました。足柄山の東までお連れすると、鎌倉殿のお考えは分かりにくいので、近江国でお命を奪つたと報告するつもりです。鎌倉殿にはだれが何を言つても、まさか願いが叶うことはないでしょう」と泣く泣く言つたので、若君はなんとも返事をしなかつた。

齋藤五、齋藤六を近う召して、「我いかにもなりなん後、汝等都に帰って、決して道にてきられたりとは申すべからず。そのゆえは、終にはかくれあるまじけれども、まさしう此有様聞いて、母うへのあまりに嘆き給はば、草の陰にても心苦しうおぼえて、後世のさはりともならんずるぞ。『鎌倉まで送りつけて参って候』と申すべし」と宣へば、良あつて齋藤五、「君におくれ参らせて後、命いきて安穩に都まで上りつくべしともおぼえ候はず」とて、涙をおさへてふしにけり。

既に今はの時になりしかば、若君御ぐしの肩にかかりたりけるを、よにうつくしき御手をもって、前へ打越し給ひ、其後西におかひ手を合はせて、静かに念仏唱へつつ、頸をのべてぞ待ち給ふ。狩野工藤三親俊、切手にえらばれ、太刀をひっそばめて、左のかたより御うしろに立ちまはり、既にきり奉らんとしけるが、目もくれ心も消えはてて、いづくに太刀を打ちつくべしともおぼえず。前後不覚になりしかば、「つかまつとも覚え候はず。他人に仰せ付けられ候へ」とて、太刀を捨ててのきにけり。「さらばあれきれ、これきれ」とて、切手をえらぶ処に、月毛なる馬に乗ったる僧一人、鞭をあげてぞ馳せたりける。北条子細ありとて待つ処に、この僧馳せついて、いそぎ馬より飛びおり、しばらく息を休めて、「若君ゆるさせ給ひて候。鎌倉殿の御教書是に候」とて、とり出して奉る。披いて見給へば、

まことや小松三位中将維盛卿の子息尋ね出されて  
候なる、高雄の聖御房申しうけんと候。疑をなさず、  
預け奉るべし。

北条四郎殿へ

頼朝

とあそばして、御判あり。二三遍おしかへしおしかへし読うで後、「神妙々々」とて打ちおかれければ、齋藤五、齋藤六はいふにおよばず、北条の家子郎等共も、皆悦びの涙をぞながしける。

齋藤五、齋藤六をそばに呼んで、「我が死んでしまったあと、お前たちは都に帰って、絶対に途中で斬られたらというのはならない。そのわけは、最後まで隠しとおすことは無理だろうが、まさにこの有様を聞いて、母上がひどくお嘆きになったら、草葉の陰でも心苦しく思って、後世を願う妨げになるだろう。『鎌倉まで送って参りました』と言いなさい」と言えば、しばらくして齋藤五が、「あなたに先立たれたあとで、生きて穏やかな気持ちで都まで上りつけるとは思えません」と涙をおさえて突っ伏した。

ついに最期のときがきたので、若君は髪が肩にかかっているのを、じつにかわいらしい手で、前にかきあげて頸を出し、その後西に向かって手を合わせて、静かに念仏を唱えながら頸をのぼして待った。狩野工藤三親俊が斬り手に選ばれ、太刀を引き寄せて、左側から後ろに回り、いまにも斬ろうとしたが、目の前が暗くなり、気持ちも萎えてしまって、どこに太刀を打ちつければよいのかわからない。前後不覚になったので、「うまくできそうにありません。ほかの人に命じてください」と言って、太刀を捨てて退いてしまった。「それではあいつが斬れ、こいつが斬れ」と言って、斬り手を選んでいところに、月毛の馬に乗った僧が一人、鞭をあげて近づいてきた。北条がなにか訳がありそうだと思って待つところに、この僧が駆けつけて、急いで馬から飛びおり、しばらく息を整えて、「若君は許されました。鎌倉殿の御教書がここにあります」と言って、とり出して差し出す。ひらいてみると、

聞けば小松三位中将維盛卿の子息を探し出した  
そうだが、高雄の聖御房が身柄を預かりたいという。  
疑うことなくお預けせよ。

北条四郎殿へ

頼朝

とあって、判がある。二三度くりかえし読んだあと、「よかったよかった」と言って置いたので、齋藤五、齋藤六はいうまでもなく、北条の家子郎等たちも、みな喜びの涙を流した。

さる程に文覚房もつと出きたり、若君こひうけたりとて  
 気色誠にゆゆしげなり。「鎌倉殿『誰申すとも叶ふまじ』と宣  
 ひけれども、文覚、やうやうに申してこひ請たり。いかに遅う  
 おぼしつらん」と申されければ、北条、「二十日と仰せられ候  
 ひし御約束の日かずも過ぎ候ひぬ。鎌倉殿の御ゆるされな  
 きよと存じて、具し奉りて下る程に、かしこうぞ。爰にてあやま  
 ち仕り候らむに」とて、鞍おいてひかせたる馬共に、斎藤五、  
 斎藤六を乗せて都へのぼらせらる。北条四郎、若君に「我身  
 も遥かにうち送り奉って、しばらく御共申したう候へども、鎌  
 倉殿にさして申すべき大事共候。暇申して」とてうちわかれ  
 てぞ下られける。誠に情ふかかりけり。

その後、文覚、もとより恐ろしき聖にて、建久十年正月十  
 三日、頼朝卿うせ給しかば、やがて謀反を起こさんとしける  
 程に、忽ちにもれきこえて、八十に余って後、隠岐国へぞ流  
 されける。

六代御前は、出家して三位禪師とて、三十にあまるまで  
 高雄におこなひすましておはしけるを、「さる人の子なり、さ  
 る人の弟子なり。頭をばそったりとも、心をばよもそらじ」と  
 て、鎌倉殿より頻りに申されければ、召し捕って関東へぞ下  
 されける。田越川にて切られてンげり。それよりしてこそ、平  
 家の子孫は、ながくたえにけれ。

そうするうち文覚房もぬつと現れた。若君の命を預かったと  
 いて、とても機嫌がよさそうである。「鎌倉殿は『誰が言っ  
 てもだめだ』と言ったけれど、この文覚がいろいろ言っ  
 て預かった。どんなにか遅いと思ったでしょう」と言ったので、北条が  
 「二十日と言った約束の日数が過ぎてしまいました。鎌倉殿  
 のお許しが得られないのだと思って、お連れして下るところに、  
 ほんとうによかった、ここで過ちを犯すところでした」と言っ  
 て、鞍をおいてひかせている馬に、斎藤五、斎藤六を乗せて都へ  
 上らせる。北条四郎は、若君に「私もはるばるとお送りして、  
 しばらくお供をしたいと思いますが、鎌倉殿に報告しなくては  
 ならない大事があります。ここでお別れです」と言っ  
 て別れて  
 下った。ほんとうに情け深い人だった。

その後、文覚は元来恐ろしい聖で、建久10年1月13  
 日に頼朝卿が亡くなったので、すぐに謀反を起こそうとしたと  
 ころ、すぐに人の知るところとなり、80歳を超えてから、隠岐  
 国に流された。

六代御前は、出家して三位禪師といて、30歳を超え  
 るまで高雄で一心に仏道修行をしていたが、「あのような人  
 の子だ、あのような人の弟子だ。出家して髪を剃ったとして  
 も、心が逸れることはないだろう」と言っ  
 て、鎌倉殿が頻りに  
 催促したので、召し捕って関東に下された。田越川で切ら  
 れてしまったという。それによって、平家の子孫は、長い間途  
 絶えてしまった。